

『関西大学 120年のあゆみ』編纂について

年史編纂室

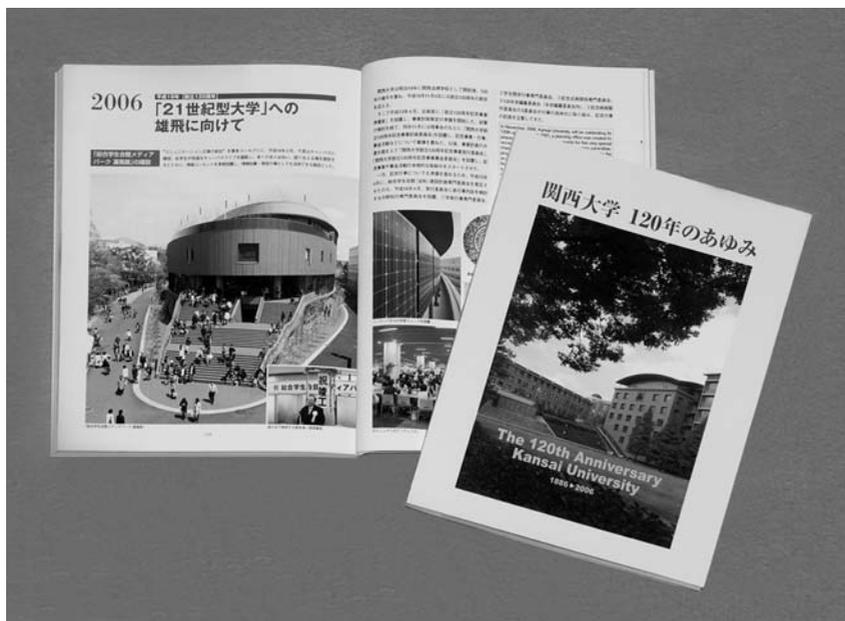
関西大学は、平成十八年十一月四日（土）、創立百二十周年を迎えた。この記念事業の一環として『関西大学 120年のあゆみ』を刊行した。

五年間のあゆみの重み

これまで関西大学年史編纂委員会は、大学の周年事業にあわせて三冊の写真集を刊行してきた。一冊は、モノクロページと大學生年譜からなる五十二ページの『關西大學七十年小史』（昭和三十年十一月五日発行）。二冊目は、カラーページ三十三ページとモノクロページ八十四ページで構成した『関西大学百年のあゆみ』（昭和六十一年

十一月四日発行）。三冊目が、創立から百年までをセピア調に、創立百周年記念式典以降をカラーでまとめ、略年譜と掲載写真一覧（邦文と英文）をあわせて百六十ページに厚みを増した『関西大学115年のあゆみ』（平成十三年十一月四日発行）である。

それから五年、関西大学は「強い関西大学」を標榜してたしかな前進をつづけ、「関大から世界へ」むけたひろい視野をもって、平成十八年十一月四日、創立百二十周年の佳節を迎えた。百十五年から百二十年までの歳月は、わずか五年とはいえ関西大学にとって深く、重い。この間、グローバルスタンダードやIT化がいわれ、教育現場にも例外なく変革の波がおしよせた。関西大学



は、急速に変化する時代に即応して二十一世紀に生き残るために、教育研究はもちろんのこと、入学試験、就職支援、社会貢献、課外活動等、あらゆる面で充実をはかりつつ難局に立ちむかい、発展しつづけている。

関西大学のキャンパスの変遷を『120年のあゆみ』の鳥瞰図からみてみよう。千里山、高槻、天六のキャンパスアメニティの充実が瞭然である。総合学生会館メディアパーク凜風館、以文館、アイスアリーナなど数多くの施設が建築され、キャンパスの様相は一変したといっても過言ではない。

年史編集史上はじめての試み

『115年のあゆみ』の発行が決まったとき、年史編纂委員会は、「今後、五年ごとに年史的な写真集『あゆみ』を製作すること」を申し合わせている。この方針を継承して『120年のあゆみ』の編集作業がはじまることになるが、前二冊とは異なり、原案づくりや写真の選定、説明文の文案は外部業者に委託するかたちをとった。これは

関西大学の年史編集史上はじめての試みであった。

編集作業の開始

平成十七年五月十二日(木)、120年史編集委員会(以下、小委員会と記す)が開催され、製作会社五社から見積書と十ページ程度のデザイン企画案が提出されたことの報告があった。各社のテーマは、「120年目の関西大学」、「道」をキーワードに構成したものの、120年の歴史を追ったオーソドックスなもの、年表にトピックスを織り込んだものなど多様であった。小委員会では企画案に順位をつけて五月十九日(木)の年史編纂委員会(以下、本委員会と記す)に提出し、学内手続きをへて製作会社を一社に絞り込んだ。

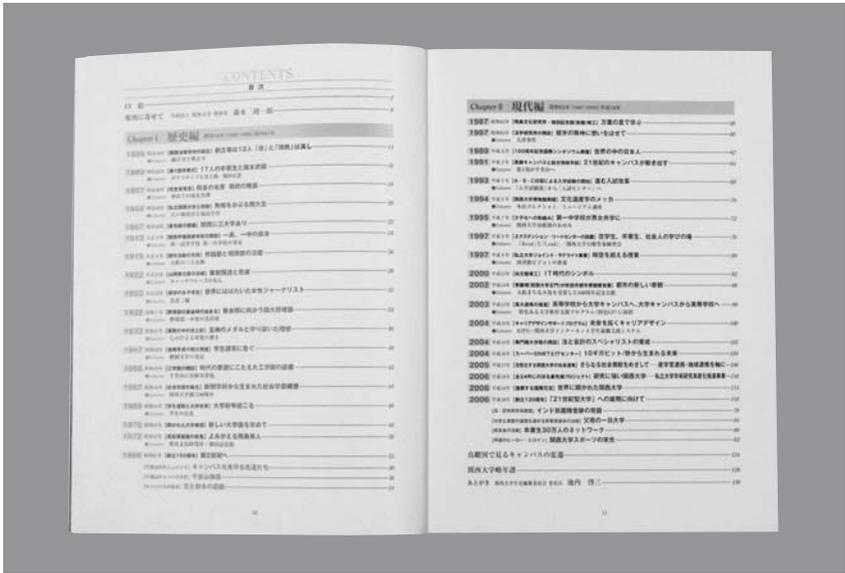
七月十二日(火)の本委員会では、創立者十二人の表記の仕方、全体のレイアウト、森本理事長との対談記事等について具体的な協議が行われている。

九月二十九日(水)の小委員会では、①口絵案 ②歴史編の展開案 ③現代編の展開案 ④インサート企画

⑤飛躍編の構成を順次検討し、③について、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの取組、キャリアセンターの活動、高度化推進事業の取り上げ方、④について、スポーツ界や芸能界で活躍する卒業生の取り上げ方が、それぞれ提案された。

これを受けて十月六日(木)の本委員会は、①口絵案は誰もが共感できるページづくりを考える ②現代編は、凜風館に設置されるソーラーシステムの写真を掲載する ③資料編には詳細なキャンパスの鳥瞰図を掲載して、時代とともに大きく拡充発展してきた大学の姿を描くこと、についてのおのおの意見の一致をみた。

十一月十日(木)の小委員会では、①口絵案は「120年目のKANDAI」とし、「関西大学のいま」を紹介するという観点に立って、大学の三つのキャンパスだけでなく幼稚園、第一中学校、第一高等学校も含め、できるだけ人物を入れた写真を多用する ②現代編のタイトルやサブタイトルを点検・修正する。③年表の「日本と世界の動き」の項目は西暦表記とし、掲載写真については著作権や肖像権の問題もことから、可能なかぎり掲



120年のあゆみ 目次

載許可をとることが確認された。このように、小委員会
で細やかな検討、修正を繰り返しつつ、本委員会にはか
る作業をかさねた。

年があらたまった平成十八年五月六日（木）の本委員
会では、できあがったばかりの校正刷りをもとに、でき
るだけ新しい写真への取替え、キャッチコピーの変更が
検討された。とくに課外活動の充実に焦点をおくことに
も、創立百二十周年記念事業の一環として建築された新
しい施設の紹介、キャンパスの主役である学生の姿が活
写されている場面を掲載する旨の要望があった。

六月一日（木）の本委員会では、解説文の英訳を山本
英一委員・外国語教育研究機構教授に担当していただく
ことが決まり、了解をえた。

七月六日（木）の本委員会では、六月二十九日（木）
に開催した小委員会からの詳しい検討報告をもとに、山
野博史委員・法学部教授が発見された『関西法律学校規
則』を掲載することや、同規則の奥付によって創立者十
二人の肖像写真の配列を決めること、プロスポーツ界で
活躍する卒業生の紹介などについて了承された。

編集の苦心談

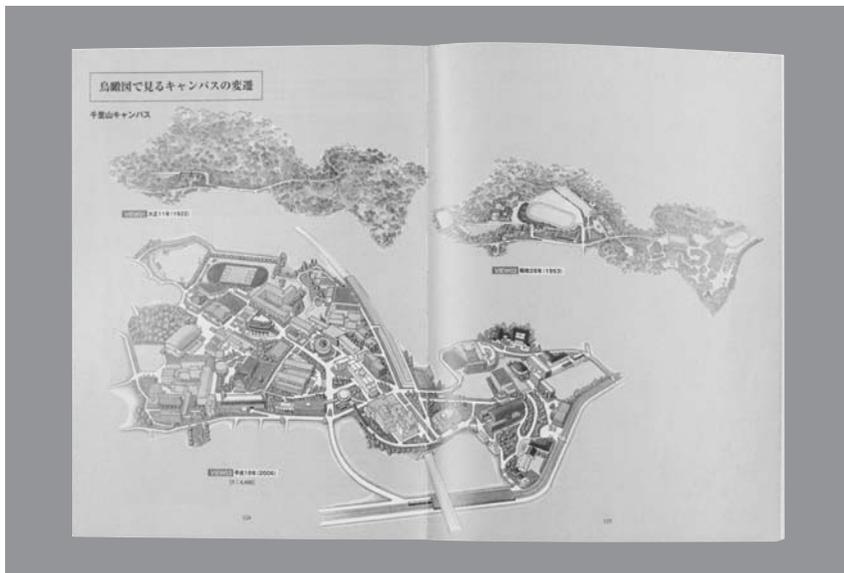
また、この本委員会では、写真集の題名を『関西大学120年のあゆみ』とすることが正式に決定した。『関西大学120年のあゆみ』は、十月十五日（日）に千里山キャンパスで開催される関西大学創立120周年記念校友総会において配付するため、九月十二日（火）の本委員会が最終の編集委員会となる。この本委員会では、八月十一日（金）に小委員会を開催し、口絵写真、歴史編のタイトルなどの精査に努め、現代編の点検・修正にあたっては学内関係部署の協力を得て「研究に強い関西大学」のペー지를充実したことが報告された。

これを受けた本委員会では、さらに、文章の重複や追加写真、鳥瞰図の拡大など、会議時間を大幅に超えて、多岐にわたって熱のこもった活発な討議があり、最終校正が年史編集室事務室に委ねられたのである。その後は細部にわたる念校、色校正をかさねて十月はじめから印刷・製本にかかり、十月十三日（金）の本委員会で披露することができた。

こうして刊行された『関西大学120年のあゆみ』は、A4判オールカラー、百四十ページ。創立期から百周年までの歴史編と、第二世紀となる百二十年までの現代編に二分し、それぞれ時代を語る事象（歴史編十八、現代編十九）を照射して、ほぼ同ページ数にまとめた。いずれも記事のなかに息抜きができるコラムをいれて、構成に変化をつけるようにした。

歴史編の説明文は『関西大学百年史』に拠るが、文章を大幅に要約するため、時代背景や大学の専門用語等を十分に理解したうえでないと、文言一つでまったく意味が異なる表現にもなることから、史実との検証には細心の注意をはらった。

歴史編の写真については、できるかぎり未使用のカットを掲載する意向もあり、膨大な枚数のなかから選別したが、たとえば、選び出した写真に「福島学舎」と裏書されているも、実際は「江戸堀校舎」である場合も起こりうる。そこで、同時代の別アングルの写真と比較し、



鳥瞰図で見るキャンパスの変遷

卒業アルバムを繰りながら事実と相違ないか検証する作業に多くの時間を割いた。

現代編は百二十分の二十である。しかし、その中身は百二十年に近づくほど急激な速さで変化し、動いている。しかも、編集のさなかにあつてなお躍動するのである。テーマを年史編集委員会で設定し、写真とコメントを学内各部署に依頼したが、なかなかびたりと納まる写真を探すのは難しい。急遽、撮影したり、パンフレットから複写したりするうちに、今度は新しいニュースが飛び込んできて企画の差替えが起こったこともあった。さらに、IT関係の場面をいかに具体的に写真で表現するかなど、いくつもの課題につきあたり、その都度困惑し、頭をしぼった。

現代編に使用する写真は、個人情報保護の観点からも、可能なかぎり本人あるいは家族の許諾を得て掲載した。オリンピックなど海外で活躍する学生のスポーツ写真の入手については、報道各社の協力を仰いだが、選手が関西大学の学生とはいえ、著作権の関係から使用料が発生するものもあった。プロ球団で活躍している選手の

写真、それぞれの所属団体や関係各位の協力があって掲載できただけに、一枚の写真のもつ重みを実感した。

歴史編と現代編の合間にインターネットした七つの記事からは、学生、父母、卒業生、教職員が一体となって今日の関西大学をつくりあげてきたことを汲み取っていただければ幸いである。加えて、イラストで描いたキャンパスの鳥瞰図と巻末の略年譜から、関西大学が総合学園に発展してきた足跡を一覧できるようにした。

刊行・納品とPR

『関西大学 120年のあゆみ』は、主として、関西大学創立百二十周年記念校友総会、関西大学創立百二十周年記念式典における記念品として配付した。また、記念事業募金の関係各位をはじめ、日本私立大学連盟の加盟大学、全国大学史資料協議会加盟校、公共図書館等へも送付した。

この『あゆみ』の刊行は、「関西大学通信」、校友会の機関誌『關大』、教育後援会の会報『葦』、年史編纂室の

ホームページなどでひろく報じ、希望者には一冊千円で頒布している。

平成十八年十月十五日(日)、千里山キャンパスの簡文館内に年史資料展示室がオープンしたことで、現物資料と写真集の両面から大学の歴史を探ることができ、展示室を訪れた方がたが『あゆみ』を求めてくださる。選び抜いた一枚の写真を指差して学生時代の思い出話に花が咲く卒業生の姿に接するとき、この編集にたずさわってよかった、と真から思う。

『関西大学 120年のあゆみ』に収載した写真は五四四枚、鳥瞰図を含めた図表が八点である。いずれも画像データとしてページごと整理・保存し、平行して編纂作業を行った『関西大学百二十年史』にも活用された。

しかし、この写真集が刊行されてなお関西大学は躍進の歩を止めることはない。『関西大学 120年のあゆみ』に登場した多くの「歴史の証人」が、将来の年史づくりに寄与することを願うものである。

(年史編纂室 森田敏朗)